

## 単数構文と複数構文\*

(The Singular and Plural Constructions)

小早川 暁 (Satoru Kobayakawa)  
獨協大学 (Dokkyo University)

キーワード：反意，比喻，換喩，数の提喩

### 1. はじめに

英語には単複の別があり、単数形は〈単数〉を表し、複数形は〈複数〉を表すのが通例である (Quirk et al. 1985: 274)。ところが用例を広く観察してみると、単数形が〈複数〉を表すこともあれば、複数形が〈単数〉を表すこともある。ここでは、単数形が〈単数〉のみならず〈複数〉を表しうるのはどうしてか、複数形が〈複数〉のみならず〈単数〉を表しうるのはどうしてかを問い、両者に統一的な答えを与える。

### 2. 〈複数〉を表す単数形と〈単数〉を表す複数形

この節では、単数形でありながら〈複数〉を表す例と複数形でありながら〈単数〉を表す例を確認する (cf. Du Marsais 1730: 97-98)。

(1)と(2)の例は、単数形が〈複数〉を表す例（単数形の複数用法）である。

- (1) a. The Italian is [= The Italians are] gay, light-hearted. (Jacob A. Riis, *How the Other Half Lives*)
- b. The enemy were visibly cracking. (*Collins COBUILD English Grammar*, 4th ed.)
- c. The foot [= The foot soldiers] were divided into six regiments. (Thomas Babington Macaulay, *The History of England from the Accession of James the Second*, Vol. 1)

- d. [The infantry are crossing the bridge.  
(Richard Bowyer, *Dictionary of Military Terms*)

- (2) a. The guests are arriving. (cf. ?Uncle Joe is arriving.)

- b. The Queen is arriving.

(Radden and Dirven 2007: 188)

(1a)は総称文で、その主語は広い意味で複数を表し、括弧内のように書き換えられる。(1b-d)の主語は動詞が複数呼応しており、複数であることが確認できる。(2)の *be arriving* は「次々に到着している」という意味を表し、複数主語を要求する。したがって、Uncle Joe のような単数主語は意図された解釈のもとでは容認しにくい。一方、(2b)の単数主語 *The Queen* が容認されるのは、これが複数の従者を想起させるからである (Radden and Dirven 2007: 188-189)。

(3)と(4)の例は、複数形が〈単数〉を表す例（複数形の単数用法）である。

- (3) It is written in the prophets [= the book of the Prophets]. (John 6: 45, KJV)

- (4) a. We are [= I am] not amused.

- b. Lend us [= me] a fiver.

(Quirk et al. 1985: 351)

これらの下線部の表現は括弧内に示してあるように単数として解釈される。

### 3. 先行研究

〈複数〉を表す単数形と〈単数〉を表す複数形をあわせて論じる研究をさかのぼると Du Marsais (1730: 97-98)の「数の提喩」という考え方に引き着く。そこでは、フランス語の例に基づき、単数形で〈複数〉を表す例や複数形で〈単数〉を表す例が一種で〈類〉、類で〈種〉を表す例や、部分で〈全体〉、全体で〈部分〉を表す例と共に一提喩として分析されている。フランス語の例がそのままドイツ語や英語の例に適用できることもあってか、その説明は広く受け

入れられている (e.g. Gibbons 1767: 74; Blair 1787: 369-370; Wodak et al. 1998: 96-102)。

その他、単数形が〈複数〉を表す表現の認知言語学的研究に Radden and Dirven (2007: 188-189)があり、UNIPLEX FOR MULTIPLEX という換喩により(2b)を説明している。複数形が〈単数〉を表す表現には触れていないが、もしこれを扱うとすれば、逆方向の換喩 MULTIPLEX FOR UNIPLEX により説明することになるであろう。

先行研究における提喩や換喩を用いた説明は、問題となっている表現の解釈を直接的に反映するもので、そもそもどうしてそのような提喩や換喩によって捉えられる現象が存在するのかが明らかでないとと言える。

#### 4. 〈単数〉と〈複数〉—反意の観点から

以下では、反意の関係にある〈単数〉と〈複数〉が同じ言語形式に結びつく論理を明らかにする。

##### 4.1. 反意とフレームと言語化

反意の関係にある概念は、次の道筋で同じ言語形式に結びつくと考えられる。

- (5) a. 反意の関係にある概念は、共通のフレームに基づく (cf. Cruse 1986: 197-198; Voßhagen 1999)。  
b. 共通のフレームに基づく概念は、同じ言語形式に結びつきうる (cf. Anttila 1989: 89)。  
c. 反意の関係にある概念は、同じ言語形式に結びつきうる。
- (6) a. All As are Bs. (7) a. All As are Bs.  
b. Some Bs are Cs. b. All Bs are Cs.  
c. Some As are Cs. c. All As are Cs.

(5a, b)から(5c)を導出することは、(6a, b)から(6c)を導出するのと同様である。この種の推論は、(7a, b)から(7c)を導出するのは異なり、常に真であるとは限らないが、日常的にはよく行われる推論 (everyday logic/syllogism) である (Anderson 1976: 347;

cf. Carter and Seifert 2013: 290-294)。

##### 4.1.1. 反意の概念が共通のフレームに基づくことを示す例

(5a)の裏付けとして(8)のような言い間違いの例があげられる。

- (8) a. I really like to—hate to get up in the morning.  
b. It's at the bottom—I mean—top of the stack of books.

(Fromkin 1971: 46; cf. Hotopf 1980)

言い間違いがしばしば類義語の間に見られることから、反意語の間に意味の類似が確認できる。

##### 4.1.2. 共通のフレームに基づく概念が同じ言語形式に結びつく例

(9)の lock について西村 (2008)は、換喩に基づく多義であると分析している。

- (9) I locked {the door/the room}. (西村 2008: 83)

どちらの lock も鍵をかけるという行為に関するフレーム、すなわち、ドアの状態を変えることにより部屋の状態を変えるというフレームに基づいており、lock the door はドアの状態変化、lock the room は部屋の状態変化を焦点化する。そして西村は換喩について(10)のように述べる。

- (10) 換喩は、ある言語表現の複数の用法が、単一のフレームを喚起しつつ、そのフレーム内の互いに異なる局面ないし段階を焦点化する現象として定義することができる。 (西村 2008: 82)

そもそも「ある言語表現の複数の用法が単一のフレームを喚起」しうるのは、(5b)のためであると考えられる。

#### 4.1.3. 反意の概念が同じ言語形式に結びつく例

(11)から(16)は、同じ言語形式に反意の概念が結びつくことを示す例である (cf. contronym, auto-antonym, enantiosemy, etc.)。

- (11) a. The moon is out [= visible] tonight.  
 b. The lights in the old house are always out [= invisible]. (Lederer 1989: 88)
- (12) a. She drew [= opened] the curtains and let the sunshine into the room.  
 b. We draw [= close] the curtains early to shut out the rainy weather.  
 (Chambers Universal Learners' Dictionary)
- (13) a. I could care less [= couldn't care less].  
 (Lederer 1989: 8)  
 b. Make a move and [= Don't make a move or] I'll shoot.  
 (Quirk et al. 1985: 832, 943)
- (14) They had only just moved in; their boxes lay on the kitchen floor, still unpacked [= not yet unpacked]. (Nunberg 2005)
- (15) He {gave/refused} her the ball. [X CAUSES Y {to/not to} RECEIVE Z] (Goldberg 1995: 75)
- (16) a. pejoration: OE *sælig* 'blessed' > silly (肯定的な意味から否定的な意味へ)  
 b. amelioration (melioration): Lat. *nescius* 'ignorant' > nice (否定的な意味から肯定的な意味へ)

(11a, b)では be out が「見える」と「見えない」の意味で使われており、(12a, b)では draw が「開ける」と「閉める」の意味で使われている (中右実先生のご教示による例)。(13a)では、本来「少しは気にする」という意味を表す *could care less* が「まったく気にしない」という意味で使われている。(13b)では、肯定命令の *make a move* が否定命令を表している。(14)は引越しまでの状況を描写するもので、*still unpacked* が荷解きでなく、荷造りされたままの様子・荷解きされてい

ない様子を表している。(15)は二重目的語構文が「受けとらせる」と「受けとらせない」という意味をもつことを示している。(16)は、意味変化が反意の方向に進むことを示すデータである。

以上確認してきたように、語からより大きな構文に至るまで様々な単位で、反意の概念は同じ形式に結びつく。

#### 4.2. 単数構文と複数構文

英語では〈単数〉と〈複数〉は二項対立の反意の関係にある。両者は(17a)のように意味上区別され、(17b)のように複数接辞の有無によって形式上区別される。

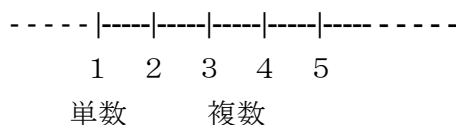
- (17) a. “one” vs. “more than one”  
 (cf. Quirk et al. 1985: 297)  
 b. morphological unmarkedness vs. morphological markedness

先に論じた(5)の「反意の関係にある概念」を「〈単数〉と〈複数〉」に置き換えると(18)が得られる。

- (18) a. 〈単数〉と〈複数〉は、共通のフレームに基づく。  
 b. 共通のフレームに基づく概念は、同じ言語形式に結びつきうる。  
 c. 〈単数〉と〈複数〉は、同じ言語形式に結びつきうる。

##### 4.2.1. 〈単数〉と〈複数〉の共通のフレーム

〈単数〉と〈複数〉は次のような数直線フレームを共有する。(ここでは、1以上の自然数が焦点化されている。)



(cf. Lakoff and Núñez 2000: 68-71)

#### 4.2.2. 反意の関係にある〈単数〉と〈複数〉 が同じ言語形式に結びつく例

(18c)を裏付けるのは(19)から(22)である。

- (19) a. This sheep looks small./All those sheep  
are ours. (Quirk et al. 1985: 307)  
b. The sheep jumped over the fence, didn't  
{it/they}? (Quirk et al. 1985: 756)
- (20) This barracks is new./These barracks are  
new. (Quirk et al. 1985: 309)
- (21) Ten miles of path {is a lot to repave/are  
being repaved}. (Waddingham 2014: 191)
- (22) 古英語にあった二人称代名詞の単数と複数  
の区別が近代英語になってからなくなり、二  
人称複数代名詞が単数も表すようになった。  
(cf. Quirk et al. 1985: 344-345)

(19)は単数形の sheep に〈単数〉と〈複数〉  
が結びついている例、(20)と(21)は複数形の  
barracks や ten miles of path に〈単数〉と〈複  
数〉が結びついている例である。(22)は(16)  
のように、意味変化が反意の方向、この場合、  
複数から単数の方向に進んでいることを示  
す例と解釈できる。

以上の議論をまとめると次のようになる。

- (23) a. 単数形の複数用法は、反意の関係にあ  
る〈単数〉と〈複数〉が同じ言語形式、  
この場合、単数形に結びついた単数構  
文の一用法であると理解できる。  
b. 複数形の単数用法は、反意の関係にあ  
る〈単数〉と〈複数〉が同じ言語形式、  
この場合、複数形に結びついた複数構  
文の一用法であると理解できる。

5. 〈単数〉と〈複数〉—比喻と換喩の観点から  
ここでは、単数構文の〈単数〉〈複数〉と  
複数構文の〈複数〉〈単数〉の間の関係を比  
喩と換喩の観点から論じる。

#### 5.1. 〈単数〉〈複数〉と比喻と換喩

(24c)に示すように、〈単数〉と〈複数〉の  
間の関係は〈部分〉と〈全体〉の間の関係に  
なぞらえて理解される。これは、(24a)と(24b)  
からの帰結である。

- (24) a. SINGULAR-PLURAL RELATION IS  
UNDERSTOOD IN TERMS OF INDIVIDUAL-  
AGGREGATE RELATION  
b. INDIVIDUAL-AGGREGATE RELATION IS  
UNDERSTOOD IN TERMS OF PART- WHOLE  
RELATION (cf. Wodak 1998: 97, fn. 74)  
c. SINGULAR-PLURAL RELATION IS  
UNDERSTOOD IN TERMS OF PART-  
WHOLE RELATION

(24a)には(25)のような裏付けがある。かい  
つまんで言えば、数の概念は具象物の数とし  
て把握されるということである。

- (25) Only at a rather advanced stage of  
intellectual development does the abstract  
character of the idea of number become  
clear. To children, numbers always remain  
connected with tangible objects such as  
fingers or beads. (Courant and Robbins  
1941: 1; cf. Lakoff and Núñez 2000: 54-56)

(24b)の裏付けは(26)から(28)である。

- (26) a. [E]very part is part of some whole and a  
whole is whole with all its parts. (Saint  
Augustine, *The Trinity*)  
b. Each individual is part of many aggregates.  
(Carlo D'Ippoliti, *Economics and Diversity*)
- (27) a. [W]hile each whole contains parts, it is part  
of a larger whole. (Edmund A. Sherman,  
*Meaning in Mid-Life Transitions*)  
b. [E]ach aggregate contains individuals who  
differ from each other. (Lemuel A. Moyé,

“Aggregation,” *The SAGE Encyclopedia of Social Science Research Methods*, Vol. 1)

- (28) a. [E]very whole is made up of individual parts, each of which plays a crucial role in making the whole what it is. (Roland Hoksbergen, *Serving God Globally: Finding Your Place in International Development*)
- b. An aggregate is made up of a collective of individuals. (Mary A. Nies and Melanie McEwen, “Preface,” *Community/Public Health Nursing: Promoting the Health of Populations*, 6th ed., ed. by Mary A. Nies and Melanie McEwen)

〈部分〉と〈全体〉の間に成り立つ関係と並行的な関係が〈個体〉と〈集合体〉の間に成り立つ。まず、(26a)が示すように、〈部分〉と〈全体〉は be part of でつながれる。同様に、(26b)が示す通り、〈個体〉と〈集合体〉も be part of でつながれる。また、(27a)のように、〈全体〉と〈部分〉は contain でつながれるが、〈集合体〉と〈個体〉も contain でつながれる。(27b)が示す通りである。さらに、(28a, b)が示すように、〈全体〉と〈部分〉が be made up of でつながれるのと同じように、〈集合体〉と〈個体〉も be made up of でつながれる。

(24c)の裏付けは(29)である。上で確認した〈部分〉と〈全体〉の間の関係と並行的な関係が〈単数〉と〈複数〉の間に成り立つ。

- (29) a. Cannot it be said that . . . one is part of ten, the line part of the poem, the verse part of the chapter? (David Thomas, *Christian Doctrines in Islamic Theology*)
- b. [T]hree contains one three times. (*Educational Weekly*, Vol. II, No. 8)
- c. [T]hree is made up of one and one and one, or two and one, or one and two. (George Ricks, *Elementary Arithmetic and How to Teach It*)

(29a)では〈単数〉と〈複数〉が be part of でつながれ、(29b, c)では〈複数〉と〈単数〉が contain と be made up of でつながれている。

以上の議論をまとめると、〈単数〉と〈複数〉は〈個体〉と〈集合体〉に基づき、〈部分〉と〈全体〉の間の関係になぞらえて理解されると言える。そして、それぞれの概念は(30)のような対応関係にある。

- (30) 〈個体〉(INDIVIDUAL)と〈単数〉(SINGULAR)は〈部分〉(PART)に対応し、〈集合体〉(AGGREGATE)と〈複数〉(PLURAL)は〈全体〉(WHOLE)に対応する。

このうち、〈部分〉と〈全体〉については(31a, b)のような関係にあることがこれまでに指摘されている。〈個体〉〈単数〉と〈集合体〉〈複数〉の間の関係が〈部分〉と〈全体〉の間の関係になぞらえて理解されているとすると、(31a, b)に基づき(32a, b)のように言える。そうすると、単数構文の複数用法と複数構文の単数用法について(33a, b)のように説明が与えられる。

- (31) a. PART FOR WHOLE  
b. WHOLE FOR PART
- (32) a. INDIVIDUAL/SINGULAR FOR AGGREGATE/PLURAL  
b. AGGREGATE/PLURAL FOR INDIVIDUAL/SINGULAR
- (33) a. 単数構文の〈単数〉と単数構文の〈複数〉は(32a)によって関連づけられる。  
b. 複数構文の〈複数〉と複数構文の〈単数〉は(32b)によって関連づけられる。

## 5.2. 〈単数〉〈複数〉とフレーム

ここでは、〈単数〉と〈複数〉の共通のフレームについてさらに考察を進め、(32a)と(32b)の間の関係について明らかにする。

〈単数〉〈複数〉が依拠する〈部分〉〈全体〉については、(34)の例が示すように、〈部分〉

が同時に〈全体〉である例があり、PART IS WHOLE, AND WHOLE IS PART と言える。

- (34) Full ownership comes only when you have made it [= the book] a part of yourself, and the best way to make yourself a part of it is by writing in it. (Mortimer J. Adler, “How to Mark a Book,” *The Saturday Review of Literature*)

ここでは、読者と本の間の関係に関して、一文の中で全体と部分の関係（大小関係）が入れ替わっている。部分は全体、全体は部分というわけである。

これと並行的に、〈個体〉〈単数〉が同時に〈集合体〉〈複数〉である(35)のような例がある。すなわち、INDIVIDUAL/SINGULAR IS AGGREGATE/PLURAL, AND AGGREGATE/PLURAL IS INDIVIDUAL/SINGULAR と言える。

- (35) a. We are one in two; two in one, both in each. (Hans Holzer, *Witches: True Encounters with Wicca, Covens, and Magick*)  
b. [Y]ou see how connected we are, one in two, two in one. (Elena Ferrante, *The Story of a New Name*)

ここでは、2人で1人、1人で2人ということが述べられている。

PART IS WHOLE, AND WHOLE IS PART や INDIVIDUAL/SINGULAR IS AGGREGATE/ PLURAL, AND AGGREGATE/PLURAL IS INDIVIDUAL/SINGULAR を基盤として、(36)に示すような概念構造の組み替えが生じたと考えるのは自然であろう。

- (36) a. PART IS WHOLE, AND WHOLE IS PART > PART FOR WHOLE, AND WHOLE FOR PART  
b. INDIVIDUAL/SINGULAR IS AGGREGATE/ PLURAL, AND AGGREGATE/PLURAL IS INDIVIDUAL/SINGULAR > INDIVIDUAL/

SINGULAR FOR AGGREGATE/PLURAL, AND AGGREGATE/PLURAL FOR INDIVIDUAL/ SINGULAR

以上の過程で(32a, b)は統合される。どちらも INDIVIDUAL/SINGULAR FOR AGGREGATE/PLURAL, AND AGGREGATE/PLURAL FOR INDIVIDUAL/SINGULAR というフレームを共有しており、(32a)は前半部分、(32b)は後半部分を焦点化したものとして分析できる。

(36)で示したようなフレームの両義性は、(37)のような考え方によっても裏付けられるし（廣瀬幸生先生のご教示による例）、(38)のような表現の基盤であるとも言える。そして、〈個体〉と〈集合体〉の間の相互依存の関係は、(39)のような〈個人〉と〈社会〉の間の相互依存の関係に由来するものと言えよう。

- (37) It [= the acceptance of ambiguity] means that we know that good and evil are inextricably intermixed in human affairs; that they contain, and sometimes embrace, their opposites; that success may involve failure of a different kind, and failure may be a kind of triumph. (Sydney J. Harris, “Learning to Live with Ambiguity,” *Clearing the Ground*)  
(38) a. Fair is foul, and foul is fair. (Shakespeare, *Macbeth* 1.1.12)  
b. All for one, one for all. (Alexandre Dumas, *The Three Musketeers*)  
(39) a. 個体あつての集合体、集合体あつての個体  
b. 個人あつての社会、社会あつての個人  
(cf. Carr 1961: 31-55; Cooley 1902: 1-13)

## 6. むすび

ここでは、(5a)と(5b)を(6)の everyday logic/ syllogism により組み合わせ、反意の意味が同一の言語形式に結びつくことを捉えた。そしてこの論理により、単数表現の複数用法と複数表現の単数用法を動機づけた。さらに、こ

これらの用法が共通のフレーム (INDIVIDUAL/ SINGULAR FOR AGGREGATE/PLURAL, AND AGGREGATE/PLURAL FOR INDIVIDUAL/ SINGULAR) に基づいており、それぞれ同一のフレームの異なる局面を焦点化したものであることを示した。

\* 本稿は、日本英語学会第35回大会(2017年11月18日、19日、於 東北大学)における研究発表に基づくものである。発表の前後に、さまざまなご助言や励ましのお言葉をいただいた諸氏、先生方に感謝申し上げたい。

### 参考文献

- Anderson, John R. (1976) *Language, Memory, and Thought*, Lawrence Erlbaum, Hillsdale, New Jersey.
- Anttila, Raimo (1989) *Historical and Comparative Linguistics*, 2nd ed., John Benjamins, Amsterdam.
- Blair, Hugh (1787) *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres*, Vol. I, 3rd ed., A. Strahan, London.
- Carr, Edward Hallett (1961) *What is History?*, Penguin Books, Harmondsworth, Middlesex.
- Carter, Kenneth and Colleen Seifert (2013) *Learn Psychology*, Jones & Barlett Learning, Burlington, Massachusetts.
- Cooley, Charles Horton (1902) *Human Nature and the Social Order*, Charles Scribner's Sons, New York.
- Courant, Richard and Herbert Robbins (1941) *What Is Mathematics?: An Elementary Approach to Ideas and Methods*, Oxford University Press, Oxford.
- Cruse, D. A. (1986) *Lexical Semantics*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Du Marsais[, César Chesneau] (1730) *Des Tropes ou des Diferens Sens, dans Lesquels On Peut Prendre un Même Mot dans une Même Langue*, Chez la Veuve de Jean-Batiste Brocas, Paris.
- Fromkin, Victoria A. (1971) "The Non-Anomalous Nature of Anomalous Utterances," *Language* 47, 27-52.
- Gibbons, Thomas (1767) *Rhetoric; or A View of Its Principal Tropes and Figures*, F. and W. Oliver in Bartholomew-Close, London.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago.
- Hotopf, W. H. N. (1980) "Semantic Similarity as a Factor in Whole-Word Slips of the Tongue," *Errors in Linguistic Performance: Slips of the Tongue, Ear, Pen, and Hand*, ed. by Victoria A. Fromkin, 97-109, Academic Press, New York.
- Lakoff, George and Rafael E. Núñez (2000) *Where Mathematics Comes From: How the Embodied Mind Brings Mathematics into Being*, Basic Books, New York.
- Lederer, Richard (1989) *Crazy English*, Pocket Books, New York.
- 西村義樹 (2008) 「換喩の認知言語学」, 森雄一・西村義樹・山田進・米山三明 (編)『ことばのダイナミズム』, 71-88, くろしお出版, 東京.
- Nunberg, Geoff (2005) "A Bad 'Un," *Language Log*. <<http://itre.cis.upenn.edu/~myl/language-log/archives/002164.html>>
- Quirk, Randolph et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Radden, Günter and René Dirven (2007) *Cognitive English Grammar*, John Benjamins, Amsterdam.
- Voßhagen, Christian (1999) "Opposition as a Metonymic Principle," *Metonymy in Language and Thought*, ed. by Klaus-Uwe Panther and Günter Radden, 289-308, John Benjamins, Amsterdam.
- Waddingham, Anne, ed. (2014) *New Hart's Rules: The Oxford Style Guide*, 2nd ed., Oxford University Press, Oxford.
- Wodak, Ruth et al. (1998) *Zur Diskursiven Konstruktion Nationaler Identität*, Suhrkamp, Frankfurt.